

第4部 土曜学級

第1章 班活動

土曜学級 夢と音 班

活動の流れ

6月12日	開級式
6月26日	自己紹介 今年度の活動でやりたいことの話し合い 係決め 班の名前について
7月10日	班の名前を選挙で決める いきものがかりのCDを聴く
7月24日	【中止】
9月11日	【中止】
9月25日	【中止】
10月9日	日帰り旅行について話し合い 学級ソングを歌う いきものがかりのCDを聴きながら楽器演奏 今後の活動について話し合う
11月13日	日帰り旅行（小田原バルで昼食、小田原城散策）
11月27日	小田原日帰り旅行の振り返り。今後の活動について話し合い マラカス作り。学級ソングを歌う
12月11日	クリスマスツリー作り クリスマス会についての話し合い 新年会についての話し合い
12月25日	近くの飲食店で外食（昼食） 歌作り ケーキを食べてプレゼント交換
1月15日	【中止】
1月29日	【中止】
2月12日	【中止】
2月26日	【中止】
3月12日	1年間の振り返り 成果発表会

1. 集団の特徴

夢と音班は男性12名、女性5名、そのうち昨年度から参加しているメンバー11名、他のコースから移動してきたメンバー6名で活動しました。

年齢も20代から50代まで幅広く、学級歴1年目から25年目以上経験されている青年もおり非常に活気あるメンバー構成でした。

歌を作ったり、歌ったりする青年が多い班となりました。

2. 活動のねらい

- ・毎回、繋がりのある活動を提供し活動の中でマンネリ化しない多数の素材を取り入れていく。
- ・音楽を通じて青年がなにものにも束縛されることなく自由に自分自身を表現できる活動を行っている。
- ・また音楽という素材を通して青年一人ひとりの意見や経験を活かし他者へアピールする力を構築する。

3. 活動の様子と評価

(1) 係決め話し合い

必要な係をみんなで意見を出し合い、自分のやりたい係を選んだ結果、班長、副班長、出席を取る係、テーブル係、お茶係、弁当係、そしてニュース係は全員それぞれに役割が割り当てられるよう係を決めました。このように係分担を活動の中に取り入れていくことも班の目標でした。

(2) 班名決め

班の名前を決める話し合いではいろいろな意見が出ました。①未来と虹②あじさい③青空と虹④キッチン太陽⑤夢をかなえた⑥夢と音⑦みんなで旅行する⑧みんなでキャンプに行きたい⑨ドレミなどが挙がり、名前は多数決で夢と音班に決定しました。

(3) 音楽活動

楽器が好きな青年からマラカスを作りたいという意見が出て、青年学級オリジナルのマラカスを作りました。ガチャガチャのカプセルの中に鈴やおはじきなどをいれてテープで留めて作成しました。完成後はみんなで楽しくくいきものがかりの「ありがとう」、「SAKURA」、「気まぐれロマンティック」など他のカスタネット、タンバリン、鈴なども使用して演奏しました。

また「新曲を作りたい」と青年たちから提案

があり、作文を書きました。そこから単語を抜粋して歌詞を作り、「みんなと友達」が完成しましたが、コロナ自粛のため学級活動の時間が少なく披露することができませんでした。

(4) 日帰り旅行

いろいろな行先の案を青年たちと電話で話し合い、最終的にコロナ自粛をふまえて小田原城散策に決定しました。

ロマンスカーは往復で乗りましたが、車窓を楽しんで写真を撮る青年がたくさんいました。

昼食は全員アジフライで、事前にお店に注文していたため、時間的に予定通り進行することができました。

また小田原城ではアイスクリームやコーヒーを飲みながら、菊花展を楽しんでいました。



(5) クリスマス会

クリスマスツリーを制作するにあたり、まず段ボールをクリスマスツリーの樹木の形に切り抜いた。そこに緑色の模造紙を貼り、そこから飾り付けで綿、鈴クリスマス用のシールなどを接着剤で貼りました。みんなでクリスマスツリーの制作を楽しみながら3台作成しました。

町田の中華料理店「南国亭」に行き、あらかじめ担当者が青年に好きなメニューを聞き注文しましたが、担当者が援助する場面が多くあり

ました。

たとえば運ばれてきたものが自分の注文と一致していたかどうか、青年の生活上の都合で食事の調整が必要であったり、公民館から「南国亭」までの人数の確認が必要でした。

「南国亭」の昼食から帰った後、クリスマスプレゼントを交換しましたが、ビンゴ、箱に番号を入れて引くくじ引きと、紐を引っ張るくじ引きの3つの方法で青年と話し合いをした結果、紐を引くくじ引きに決定しました。

(6) 成果発表会

コロナ自粛のため午後からの活動であり時間がとれませんでした。一年間の活動の中で印象に残ったこと、これからしたいことを青年たちとそれぞれ話し合っ、発表会の段取りを全員で決めました。

最後に学級ソング「ぼくらの輝き」をみんなでオリジナルマラカスを使って演奏しました。

4. 課題と展望

マラカスなどの楽器作りについては青年一人ひとりのできるところは見守り、できないところだけをフォローすることにより達成感是非常に大きな活動になりました。

日帰り旅行では青年の一人が長時間の歩行が困難で、車いすを必要とする事態となり、その結果、予定していた行程を一部修正することになりました。

このことから、担当者間の情報共有が課題として認識されました。

クリスマスツリー作りに関してコロナ感染状況の中、密を避けるためにクリスマスツリーを3台作成した中で担当者とする青年が1対1で作成していた場面も見受けられたため、他の青年にもあまり目を配ることができませんでした。たとえば活動の写真を撮りながら全員に目を配るなどの工夫が求められます。

また、接着剤で飾りつけを行いました、接着強度が足りずうまく貼ることができませんでした。

マラカス作りに関して材料の準備不足のため、途中で材料を購入する場面もありました。歌作りに関しては青年たち一人ひとりの作文を通して、自分の感情、気持ち、思いを表現しました。

新曲「みんなと友達」を作詞・作曲することができましたが、コロナの影響により披露する場面がとれませんでした。

班活動で「みんなと友達」を演奏する機会はわずかな回数したが、その機会を増やすことが十分に出来ませんでした。



みんなと友達

音と夢
土曜学級2021年度

Clarinet

The musical score is written for a Clarinet in 3/4 time. It consists of ten staves of music. Each staff has a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). The lyrics are written below the notes, and chords are indicated above the staff. The lyrics are: わたしには すきなものが たくさんあります。うたうこと おどること え を かくこと。ピアノギター マラカース がっきひくこと。あにめみて えほんみて でんしゃの ること。いちばんすきなこと がっきゅうですごすじかん。がっきゅうにきて みん なとあうこと。わたしのさい こうの たか らもの。さあ てをとり あって わに なるう。ここであえた ことが さいこうのしあ わーせ。みーん な ともだち ずっとずっと ともだち。

C Dm C G
わ た し に は す き な も の が た く さ ん あ り ま す

C Dm C G
う た う こ と お ど る こ と え を か く こ と

F C Dm G
ピ ア ノ ギ ター マ ラ カ ース が っ き ひ く こ と

F C Dm C
あ に め み て え ほ ん み て で ん しゃ の る こ と

F C F C
い ち ば ん す き な こ と が っ き ゆ う で す ご す じ か ん

F G F G
が っ き ゆ う に き て み ん な と あ う こ と

F C F G
わ た し の さ い こ う の た か ら も の

さ あ て を と り あ っ て わ に な る う

こ こ で あ え た こ と が さ い こ う の し あ わ ー せ

み ー ん な と も だ ち ず っ と ず っ と と も だ ち

土曜学級 虹色のパプリカ 班

活動の流れ

6月12日	開級式、自己紹介
6月26日	班の名前決定、役割決定、スポーツなど
7月10日	七夕、パプリカダンスなど
7月24日	中止
9月11日	中止
9月25日	中止
10月9日	スポーツ、パプリカダンスなど
11月13日	小田原日帰り旅行
11月27日	モルック作り、小田原の思い出、モルック、パプリカ
12月11日	芹ヶ谷公園で昼食、モルック、クリスマス会の話し合い
12月25日	調理（あんかけ焼きそば）、クリスマス会
1月15日	中止
1月29日	中止
2月12日	中止
2月26日	中止
3月12日	1年間の振り返り 成果発表会

1. 集団の特徴

虹色のパプリカ班は男性5名、女性6名の計11名で活動しました。

スポーツや体を動かすことが好きであり、活動の内容を全員で創り上げる気持ちが強い集団でした。

2. 活動のねらい

- ・スポーツを通して、楽しみの中から得られる学びを見つける。
- ・また、スポーツに関連することやスポーツ以外の活動にも果敢に挑戦する。

3. 活動の評価

(1) 話し合い・活動の方針、方向決定

班の運営として、話し合いは今後の活動を決定するうえでも欠いてはなりません。話し合いでは一部の青年の意見をもとに全員で賛同を得たり、否認を受けたりして活動を決定しています。

今期出た意見としては「あんかけ焼きそば作り」「クリスマス会」「喫茶けやきに行く」「新しいスポーツを作る」「ボウリング場に行く」などが挙がりました。

(2) 七夕作り

季節に合わせた活動ということで、七夕の笹を模造紙で作り、短冊や飾りを作り、模造紙に貼りました。

季節行事のため分かりやすい活動であり、願い事を書くという点でも成果が目に見える活動です。

(3) パプリカダンス

おそらく青年学級として共通に人気のある「パプリカ」という楽曲。担当者のタブレットを使用し動画サイトでパプリカの映像を流し踊りました。

音楽を流しながら踊るという活動ではありますが、活動にまとまりが出て、青年の中には踊りを覚える、とにかくりズミカルに踊るなど楽しい活動となっています。

踊りを覚えるのはなかなかハードだったと思いますが、同じ映像を見て踊るということに一体感が生まれていました。

(4) ペったんダーツ

ペったんダーツは15年度スポーツ班で誕生してから長く親しまれているスポーツです。

ルールはマジックテープがくっつく布に得点を

書き、マジックテープの貼られたボールを投げて得点を競うスポーツです。

(5) 音楽活動

スポーツが「動」の活動ならこちらは「静」の活動です。

青年の好きな音楽を活動の合間に流して歌ったり踊ったり聴いたりしました。

活動としては「静」と「動」を合わせることでメリハリが出て、気分も落ち着く活動になりました。スポーツを盛り上げるためにも、合間に音楽を流したりしていますが、リラックス効果もありとても受け入れられていました。

(6) 小田原日帰り旅行

緊急事態宣言が明け、新規感染者数も落ち着きを見せたところでの活動でした。

話し合いの活動がなかったため、担当者が事前に下見しスケジュールを練ったうえで行動計画を立てました。

行きはロマンスカーで小田原に向かい、到着したらすぐミナカ小田原のフードコートへ向かいました。

フードコートでお昼を食べた後はおみやげを買って、忍者ショーを観るため徒歩で移動、観覧後は小田原駅の地下のタピオカドリンクショップでタピオカを注文し、ロマンスカーで町田に戻りました。

その次の活動では思い出しを作文に書いて発表しました。思い出しながら楽しみの記憶を掘り起こしながら書くので学びにもつながります。

(7) モルック

今年度の新しい取り組みです。素材提供は担当者がしました。

モルックとはフィンランド生まれのスポーツであり、新しいスポーツとして取り入れることになりました。

本来のルールは木の棒を1～12の数字の書かれた木製のピンに投げて得点を競うスポーツで、倒した本数によって得点が決まり、複数本倒れたら倒れた本数が得点、1本だけ倒れた場合はピンに書かれた数字が得点になり、倒れたピンは倒れた地点で立て直すというルールです。

ゲームを進めていくとピンは離れていき、点数

を狙うのが難しくなります。

本来のルールでは2チーム戦で、得点が規定の点数(50点)ちょうどになったチームが勝利です。

虹色のパプリカ班ではアレンジを加え、木製のピンは手軽な500mlのペットボトルに置き換え。投げる棒も500mlのペットボトルを使用しました。

紙に1～12までの数字を書き、ペットボトルに巻き、貼り付けて作成しました。

また、投げる回数を全員が平等に投げられるようにするため、規定の点数ではなく合計点を競う方式にしました。

全員で力を合わせて合計点を目指すもよし、チーム戦で合計点を競うもよし、様々なバリエーションで遊べて、かつとても盛り上がるスポーツになります。

戦略はたくさんのピンを倒すか、高得点のピンを狙うことです。たくさんのピンを倒すことでも「すごい!」と盛り上がり、高得点のピンを狙うことでも「何点?」とかで盛り上がりました。

班の中では人数に合わせて、紅白戦や2チームや3チームでの対抗戦などのルールで盛り上がりました。

また室内でも室外でも遊べるスポーツであり、班活動の中では好評です。

(8) 喫茶けやき

青年の職場の様子を窺える機会です。

喫茶けやきは人数制限のため、班の全員が食事をするのが困難であったため、東急ストアでお弁当を買って芹ヶ谷公園で食事するグループと喫茶けやきで食事するグループに分かれて行動しました。

喫茶けやきは芹ヶ谷公園の国際版画美術館の中にある喫茶店で、そこで勤務している青年がおり、「自分の職場のアピール」という側面もあると思われま

(9) 調理

ある青年の要望で過去の年度でやったことをもう一度やりたいという青年の要望もあり、「あんかけ焼きそば」を作りました。

味はあんかけ焼きそばらしい鶏がらスープの素を主体にした中華味、ソース味の二種類のあんか

けを作ることになりました。

調理は野菜がとても多く、無駄なく使う方法をみんなで話し合っ

て、急遽スープを追加しました。これは、担当者の適切な関わりが求められた場面でした。

(10) クリスマス会

ケーキを出し、シャンメリーを注いだところで担当者がサンタクロースの仮装をし、全員にプレゼントを配布しました。

クリスマス会の話し合いはクリスマス会前の活動でしており、「チキンマックナゲット、ケーキ、シャンメリー」をいただきました。

プレゼント交換も検討されましたが「一度手に触れたものを配布するのはやめたほうが良い」というコロナ禍を鑑みた意見もあり、今年度のプレゼントは担当者が配布する形式となりました。

(11) 成果発表

成果発表会の舞台では、青年が1年間の活動の思い出を絵や作文にして、それぞれ発表しました。

そこに、担当者が作成した1年間分の動画も加えて発表し、パプリカで終わるというものでした。

成果発表後は1年分の活動を収めたDVDを配布しました。

4. 課題と展望

コロナ禍の影響で活動日数が少なく、そこからの課題と展望を出すのは難しいのですが、展望として見えたのは新型コロナの感染対策を落ち着いてできるようになったことが挙げられます。

感染対策として一例をあげると、昼食後は弁当をあえて青年たちが用意せず片付けず、ビニール手袋を着用した担当者が弁当を下げるとい

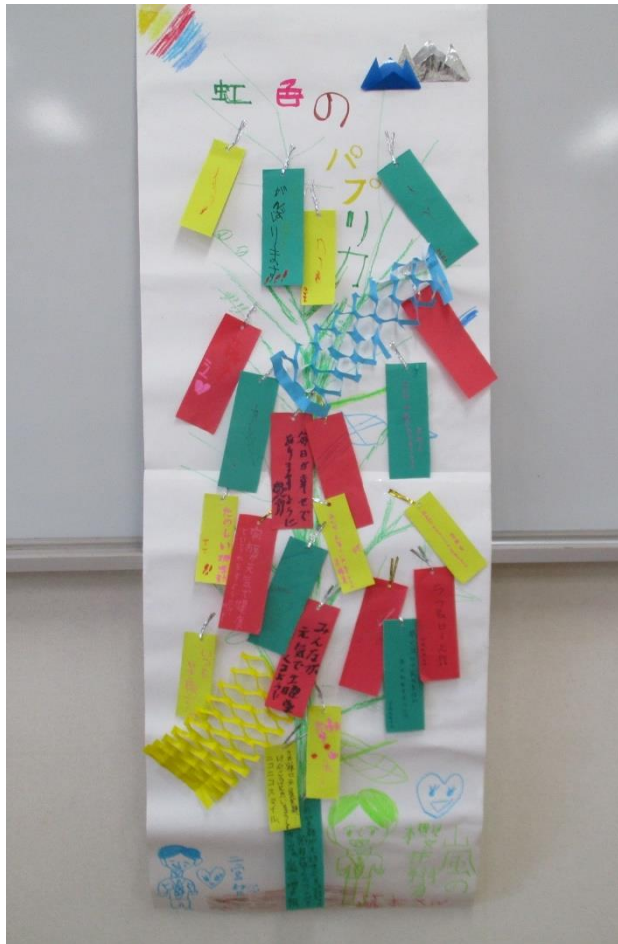
うものです。素手で弁当を触ると感染リスクを高めてしまうと判断していますが、青年が弁当を自分で片付けることに慣れているので理解を求め、コロナが落ち着いたタイミングで元の配膳方法に戻すか協議が必要です。

また活動ではモルックを例に挙げると、得点のつけ方やペットボトルの投げ方などの「学ぶこと」、

スコアに一喜一憂する「楽しむこと」、これはどの活動にも言えることですが学びと楽しみの両立を永遠のテーマにしています。新型コロナ対策から浮き彫りになる「学び」や活動を創り上げる「楽しみ」。今年度は両立できました。

「学び」と「楽しみ」の両立に対する課題は「継続をしていけるか」に尽きると思います。これは活動を一緒にやっていく青年や担当者と手を取り合って経験を積まないといけないことです。

新型コロナウイルス感染症から早3年目。東京都ではマスク着用緩和の発表がされましたが、執筆現在では世間の情勢を見てもマスクを外すタイミングはまだ訪れていません。やがてはマスクをしなくても誰も気にならない活動が望まれます。



土曜学級 アマビエ 班

活動の流れ

6月12日	開級式
6月26日	班の名前について話し合い。HS1さんが疫病退散の願いを込めてアマビエの提案、班名に決定。一年間の計画話し合い。
7月10日	七夕を楽しむ。アフターコロナについて話し合い。
7月24日	【中止】
9月11日	【中止】
9月25日	【中止】
10月9日	11/13の箱根外出について話し合い。
11月13日	箱根へ外出
11月27日	班長決め
12月11日	調理活動 スパイスからカレーづくり
12月25日	クリスマスを楽しむ。
1月15日	【中止】
1月29日	【中止】
2月12日	【中止】
2月26日	【中止】
3月12日	活振り返り 成果発表会

1. 集団の特徴

アマビエ班を構成するメンバーは年度内に変動がありました。メンバーの女性は1人で変わらず、男性は8人から7人へ減少。担当者の女性は1人から0人へ減少、男性は2人から3人へ増員となっていました。

昨年度同様コロナ禍における感染防止のため、対面での活動を見送る青年も多く、学級を構成する班、班を構成するメンバーの話し合いが十分できず、開級式事前アンケートに基づく班編成となっています。

そのため、初めて同じ班になったという青年同士もいました。

2. 班活動のねらい

自身や仲間の生活について考えながら、他者の経験や意見を吸収する。

そうすることで、未知の問題や課題への対応力を身につけるきっかけをつくる。

～活動で大切にすること～

- ・それぞれが認識している問題や課題を共有する。
- ・他者から共有された問題や課題について、自身の経験や意見を他者と共有する。

3. 活動の評価

(1) 集団づくり

前期の活動5回は、OJさん、OMさん、KYさん、HS1さん4名が交互に参加している状況でした。

KYさんとHS1さんは同じ職場で、職場の送迎車も一緒になることが多く、車内では色々な話をしているそうです。職場では、二人の担当が異なるため会う機会は少ないそうです。どちらかが学級を欠席しているときは、学級へ参加している方が相手の欠席理由を班へ報告していました。

OJさんが活動に参加すると、班の雰囲気も変わります。OJさんは自分の発言の中で、皆に話を振ることが多く、振られる話題も、皆にとっては意外性に富んだ内容であることから会話が膨らみ、それが場の雰囲気を変える要因なのだと思います。

その展開の延長でOJさん以外のメンバーがOMさんへの語り掛けることもあります。しかし、OMさんはゆっくり話す人なので、話しかけた青年はOMさんの反応を待たず、別の青年へ話題が移ることもありました。そのOMさんが活動へ参加しやすくなるため、担当者は語り掛ける青年の言葉を噛み砕き、シンプルな質問

へ変換して青年に代わって再度OMさんへ語り掛けるようにしました。シンプルな質問に変換することで、OMさんも応答しやすくなるのか、これまでよりも早いテンポで会話が進行していきました。

12月25日の活動には、青年学級参加歴としてはベテランとなるNYさんが、今年度に入って初めてアマビエ班のメンバーと対面しました。NYさんが優しい口調で話す自己紹介を聞いていたHS1さん、KYさん、OJさんも楽しそうに、色々な質問をしていました。

NYさんが青年学級に参加したのは約50年前です。当時の青年学級活動拠点の旧公民館周辺の様子や、青年学級のはじまりにも話が膨らみました。50年前の話聞き終えたHS1さんは「じゃあ、この人(NYさん)がいなかったら、俺もココにいなかったんだ!」とNYさんに対して「ありがとうございます!」と返していました。

(2) 生活づくり

OJさんは学級外で体験したことを、班のみんなへ報告したり、考えたことを問いかけたりすることがたくさんあります。

そのひとつ、東京日本橋の人型ロボットカフェに行ってきた話をしていましたが、ロボットカフェが何者なのか、聞いている青年にはイメージが湧いていない様子だったので、パソコンとプロジェクターを繋げてロボットカフェの情報や店内の写真をスクリーンへ投影しながら、OJさんの話を聞きました。

年度はじめの頃、KYさんがこの班でやってみたいこととして「パソコンを使えるようになりたい」という要求がありました。KYさんは手指の可動域に制限があるので、キーボードやマウスの操作は難しいのですが、最近のパソコンでは、AI音声認識も身近に使えるツールとなっています。

KYさんと一緒にパソコンの音声認識AIでWEB検索に挑戦してみました。しかし、音声が入ったとおりに認識されず、期待通りのWEB検索は出来ませんでした。今回は咄嗟に思いついた支援だったので上手く行きませんが、音声入力のコツをKYさんへ説明すれば、音声によるパソコンやスマートフォンの操作を体験できるようになると思います。

① コロナと向き合う

秋の外出活動については、感染状況を考慮しながらの話し合いとなりました。

青年学級では自治を大切にしています。例年、秋の外出活動については、各班で話し合っ

た結果を班長会へ報告。班長会で土曜学級としての方針を決定。班長会での決定事項は、班長が各々の班へ伝えます。そして、班は班長会の方針に沿った活動計画を立てるという流れでした。

今年は、活動休止が続いたので従来のプロセスを経ることは困難だと判断し、青年たちへは予め、秋の外出活動については、担当職員と担当者で準備を進めるという提案をしました。

アマビエ班では、秋の外出活動の是非についても話題となりました。

OJ さんからは、外出できるチャンスを生かしたい、再び感染が拡大して学級活動が制限される前に外出をしようという意見でした。

この話題の延長で、車いす利用の KY さんからは、朝夕の集いにおける仲間との物理的な距離について問題が提起されました。その内容は、僕はコロナに罹りたくないの、他の人には近くに来ないで欲しいというものでした。KY さんは自分の行きたいところへ自由に移動できません。彼の近くへ仲間が近づいてきても、彼自身は避けられないというものでした。同じように困っている青年も他にいると思われました。

②仲間と久しぶりの再会

11/13 箱根へ向かう日は、HH さんにとって今年度初の活動参加でした。久しぶりに参加した HH さんは、静岡での生活を楽しそうに仲間へ話していました。

HS1 さんや KY さんは色々な質問を投げかけていて、それに答える HH さんもとても楽しそうでした。

③生活における青年学級の位置づけ

後述する諸事情により前期の活動をお休みしていた TJ さんは、11/27 から活動参加を再開しました。

生活の拠点をグループホームへ移したことで、グループホームから土曜学級に参加するには、家族の送迎が必要になること。TJ さんが家族による送迎が必要となった背景も実践報告の説明として付け加えます。

普段の外出支援はガイドヘルパーへ依頼しているそうです。しかし、TJ さんは予定の時刻になっても家を出られないことが多く、そんなときはガイドヘルパーさんに待っていただくことがあるそうです。大概是時間を掛ければ外出する気になって、ガイドヘルパーと外出するそうですが、時には数時間待った挙句に外出を取りやめ、ヘルパーさんにはお帰りいただくことがあるそうです。

そのため、家族としてはガイドヘルパーの利用が少なくなっていました。また、家族は、さんご本人にとって、青年学級に参加することの優先順位はそれほど上位ではないという認識だったそうです。そのため青年学級に行くための外出支援も減っていたというお話でした。

そんな TJ さんも、11/26 は家族が送迎できるので、学級参加の予定を立てたそうです。前日 25 日、TJ さんをご実家に宿泊し、家族と夕食をとっていたそうです。その夕食時に、TJ さんから「明日は青年学級！」という主旨の話題が出てきたことで、ご家族は TJ さんが青年学級を楽しみにしていることを知ったそうです。そして活動当日の朝、いつもは支度に時間がかかり、約束の時間に家を出ることが難しかった TJ さんが、すぐに支度を済ませ、約束の時間に家を出発できたそうです。

そして生涯学習センターで仲間と再会したとき、今朝の様子を踏まえ「こんなに楽しみにしていたことを、私たち親の都合で軽んじてきたことを申し訳ないと思ったし、悲しくなりました」と、涙を流しながらこれまでの経緯を説明してくださいました。この日以来、TJ さんご家族はコロナ感染状況を見ながらも学級活動参加ありきで、家族内で対応を調整されているそうです。

④スパイスからカレー作り

スパイスを購入する必要があるの、何をかうか話し合いから始めました。この場面では HS1 さんや OJ さんからカレーに関する知識が披露されていました。例えば、HS1 さんが上げた一つ目のスパイスは、グランマサラ、二つ目にクミン。OJ さんも黄色の出るやつ（ターメリック）、コリアンダー、ローリエを挙げていました。青年からのスパイスはこの 4 つでしたが、担当者側で事前に調べておいたカルダモン、オールスパイス、チリペッパーを加えてみてはと提案し、この日に購入するスパイスが決まりました。

スパイスから作り上げるカレーは、作るプロセスも楽しく、出来上がりも上々で皆さん完食でした。

⑤お金の話（宝くじで 10 億円が当たったらどうする？）

年末の活動で、お金に関する話題として「10 億円当たったらどうするか」思い思いの夢を発表しあいました。

OJ さんは「たくさん本を書いて、自費出版したい」HS1 さんは「ビッグボスに会いに行きたい」「ゲームソフト沢山買いたい」NY さん

「ビル建てて、テナント沢山いれて、呑み屋をやりたい」

10億というお金がどれほどの量なのかその捉え方にもばらつきが出ましたが、お互いの夢を語り合うことができ、そして楽しい会話でした。

コロナ禍に入って2年目、去年は心配されたコロナ感染対策も青年に定着していることが伺えました。買い物や散歩など、人混みを避けたいので行かない」という意見や「今はやめておく」という意見。

青年学級に来ること自体も「本当は怖いと思っている」という意見もありました。

青年や彼らの職場と家庭が守ってきた安全対策の積み重ねを学級活動で壊さないよう、今後も注意が必要だと思いました。

4. 課題と今後の展望

コロナ感染予防のため、学級活動が計画的に行えていない中、ガイドヘルパーを利用して通級する青年からは、学級開催の予定がヘルパー確保に影響するので、早めに活動有無を決めて欲しいし、直前の予定変更もやめて欲しいという問題も提起されました。

年度当初に聞いてきたメンバーのやりたいこと、それを一つでも多く活動に取り入れたいと思っていましたが、減少する活動時間は不十分だったかもしれません。

感染が収束し安全に学級活動ができる状態になれば、仲間の顔を見ながら活動できる日が訪れると思いますが、その日が待ち遠しいと思います。

土曜学級 けやき坂 班

活動の流れ

6月12日	開級式
6月26日	ダリア園見学。休憩所で昼食、園内散策。往復バス利用。話し合い。班長決め、結論が出ず。9月の日帰り合宿。
7月10日	午前中のみ活動。押し花づくり。押し花で絵葉書を製作。
7月24日	中止
9月11日	中止
9月25日	中止
10月9日	感染対策のため午後から活動。話し合い（日帰り旅行、班長選出等）。立候補する青年もいたが、ご家族とも相談の結果、班長選出に至らず。芹ヶ谷公園散歩。
11月13日	日帰り外出。小田原、海老名、ロマンスカーミュージアム。
11月27日	枯れ葉や木の実を使ってカレンダー作り。芹ヶ谷公園散歩。
12月11日	クリスマスリース作り、外出してカフェで食事。
12月25日	クリスマス会、からあげ弁当。芹ヶ谷公園
1月15日	中止
1月29日	中止
2月12日	中止
2月26日	中止
3月12日	1年間の振り返り。写真と台詞で構成した資料で1年間の活動を発表。

1. 集団の構成、特徴

2021年度は変則的な運営となりました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により6月まで開級を見送っていましたが、青年たちの要望を受けて生涯学習センター及び担当者会議で協議を行い、7月から半日単位での活動を開始しました。

その後、夏休みを挟んで12月まで実施しましたが、蔓延防止重点措置により再び活動を中止とし、成果発表会が予定されていた3月12日には午後から半日のみ班活動を行い、主に1年間の思い出の写真を使った活動報告をホールで行いました。

班の構成は男性7名、女性1名が参加、計8名と、土曜学級の中では平均的なサイズの集団です。

全体的に言葉のコミュニケーションが難しい青年が多く、話し合いを行うときには担当者の適切な関わりが欠かせません。

また、落ち着いて座っていることが苦手な外へ出て行ってしまふ青年や、トイレにいったん入るとそこから離れにくい青年もいて、担当者がその都度の対応を求められることがしばしばあります。

これらの事情から、ひとつの作業に全員で参加することは難しい面もあり、当日の活動を円滑に進めるためには事前の準備のみならず、担当者相互のコミュニケーションの大切さがあらためて認識されました。

2. 活動のねらい

- (1) ものづくりの活動を通して、お互いに認め合い、落ち着ける集団作りを目指す。
- (2) ひとつのものを完成させる取り組みを通じて分担や協同を学ぶ。
- (3) 話し合ったことを目に見える形にしておく。作ることの喜びを体感する。
- (4) 作ったものを家庭に持ち帰り、ご家族とも達成感や楽しい思い出を共有する。

3. 活動の様子

(1) 班名決め、班長決め

班名について話し合いで投げかけたところ、ひとりの青年からの「けやき坂班」という提案があり、他の青年からも賛同の声があり決定しました。

班長決めについては、ひとりの青年から「やります」との表明がありましたが、話し合いに参加することは実際には難しいことからご家族に相談した上で見送りました。他に誰からも立候補がなく、候補になりそうな青年に担当者から声をかけましたが、やりたくないとの明確な返事。結局、1年間を通して班長は選出されませんでした。

(2) ダリア園見学

ダリア園の今年のオープンに合わせ、バスを利用して外出しました。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う外出制限が一区切したタイミングで、青空のもとで出かける貴重な一場面となりました。



(3) 押し花作り

一般的には誰もが経験のある手作業ですが、思いのほか知識や手技、経験値が必要で、青年たちに声掛けをしつつ担当者が相当程度手を出して完成させました。

例えば、紙で押さえて適度な圧力をかけて吸水する、電子レンジで加熱し乾燥させる等々。これらの知識と手技は、普段何気なく私たちが使っているものですが、青年たちにとっては抽象理解や生活経験の狭さから、分かりにくい面もあったと思われます。

うつろいやすい花色を乾燥することによって、しばし手元に留め鑑賞ができるなどの文化的背景を共有してこそ、押し花という遊びに妙味を見出すことができるといえますが、そこまでを共有できたかどうかは疑問が残ります。

このような奥行きのある活動は、青年たちが“やりたいこと”と必ずしも一致するとは限らないと

もいえますが、良質な文化を提供してこそ学習活動であると考えられます。

(4) 芹ヶ谷公園散歩

緊急事態宣言は解除された後も、リバウンド防止措置期間とされたことから、半日(12:30~15:30)の活動としました。前回(7月)に午前中の活動の活動では昼食を提供しなかったことで空腹が気になった反省から、早めの昼食をとってから集合して午後の活動としました。

秋空のもと、木の実や木の葉を拾いながらゆっくりと散歩をしました。緊急事態宣言による外出の制約が長く続いたことから、このように連れ立って公園を散歩するのは久しぶりの青年が多かったと思われまます。解放感に包まれる半日を過ごしました。



(5) 日帰り旅行

日ごろから青年たちの要望があるロマンスカーをメインテーマにした旅行を企画しました。往路は小田原までロマンスカー、帰路は小田原から海老名までロマンスカー、海老名で下車してロマンスカーミュージアム見学と、青年たちの興味関心を中心に行程を組み立てました。

車窓の景色から目を離さない青年や、ロマンスカーに乗車したことに感激して涙を流す青年もいました。好天にも恵まれ旅行気分を存分に味わえたようです。普段はこうした体験を楽しむことが難しい青年たちにとって貴重な日帰り外出となりました。



このような外出をする際、本来であれば乗車券の購入は駅の券売機を利用するなどして、担当者が支援しつつ青年たち自らが体験できるように計画を組むべきところですが、集団行動の中で安全第一を考え、担当者が全員分の愛の手帳を預かり乗車券をまとめて購入し、それを青年とペアを組む担当者が持ち、改札口を通ることとしました。

知的障害のある青年たちにとって公共交通機関を利用して外出することはハードルが高いのが現状です。また、ご家族の高齢化に伴い遠出は困難になる現実も一方にはあります。

またロマンスカーミュージアムをインターネットで予約しQRコードを提示して入場するなど、ICTの進歩が多くの人に利便性をもたらす一方で、それが利用できない人にとっては社会参加の障壁となっている面もあることにも気付かされました。

こうした時代の変化の中で知的障害のあるひとの社会教育を今後いかに充実させていくかが課題であるとあらためて認識されました。

(6) カレンダー作り

芹ヶ谷公園の散歩で拾い集めた木の葉や実を使って、季節感を演出したカレンダー作りに取り組みました。学級開催の予定日にはシールを貼って、本人や家族が見て分かるように工夫しました。

知的障がいの特徴の一つとして時間や日にちの前後関係、間隔など、時間軸の把握に困難があることが指摘されます。カレンダー作りはこうした課題を踏まえて活動に取り入れたものですが、日常的にも学級活動ではホワイトボードに時計の絵を描く、カレンダー上で予定を示すなどして、可能な限り時間軸を視覚化するような工夫をしています。

(7) クリスマスリース作り

クリスマスリース作りの合間に、散歩がてらシバヒロ近くのカフェに外食に出かけました。ここは学級に参加している青年も利用しているショートステイとグループホームの事業所が一般向けに営業しているところです。そのテラス席でゆっくりと昼食としました。食事は出来上がったものから供されましたが、全員分が揃うまで待ち、「いただきます」をして食事を開始しました。

家庭での少人数での食事やガイドヘルパーさんとの外食とは異なり、グループで食事をするときの作法を共有することの大切さがあらためて感じられました。



第2章 自治運営

1. 班長会

(1) 班長会とは

班の代表者である班長、副班長が各班の意見を持ち寄って、学級全体に関わることについて話し合います。また各班の活動を報告し情報共有する場でもあります。

昨年度は新型コロナウイルス感染症に伴い開級式が中止になりましたが、今年度は開級式を実施し班編成ができたため班長決めをしたものの、4班のうち最終的に班長が決定しなかった班が1班できました。青年の家庭事情もあることが推測されますが、班長をすることができる青年が班によってかたよってしまいました。

班長を経験していない青年にとっても参加をしやすい班長会にしていくことが大切です。

また新たに班長を経験した青年が2名いましたが、班長として積極的に参加する機会は多くなく、発言しやすい環境と、新しい班長を積極的に受け入れる姿勢が充分かどうか課題として残りました。

(2) 討議内容

今年度の班長会は、学級活動終了後15分ほど使い、2回開催されました。

12月11日(土)

各班の活動内容の共有

また、朝と帰りのつどい担当を次回の班長会までに募ることにし、班長会の実施時間についても話し合いました。

ここでは、「時間を決めてやりたい」と「早く終わってほしい」という意見が出ました

12月25日(土)

各班の活動内容の共有

朝と帰りのつどい担当の立候補と推薦

成果発表会については、準備のことや開催時間のことを確認しました。

(3) 取り組みと評価、今後の展望

今年度は班長会での取り決めもありましたが、1月からの新型コロナウイルス感染拡大に伴い、取り決めを実行できないまま今年度を終えました。

班長は班の代表になるため、意見や情報交換も担当者も含めしっかりかかわる必要があります。

議論の場としても情報共有の場としてもどちらも機能することが班長会を実施する意味ではないかと考えます。

今年度は各班の活動の情報共有はできたものの、活動の内容に関して班長同士でポジティブに反省する場があってもよかったのではないかと思います。

また班長会の実施時間に関しても取り決めをすべきという意見が出ました。

新型コロナウイルスによるパンデミック宣言が出て早3年目。今後の先行きは不透明ですが、昨年度と比較して光明も見えており、来年度は班長会と各班への相互への取り組みをまとめる場や、企画の運営としての役割を果たすことに大きな期待がかかります。

また来年は土曜学級25周年で、それに向けての話し合いも期待されます。

第3章 考察

考察

1. 土曜学級の概要

1997年度より、第2・第4土曜日に町田第二小学校の開放教室を利用して、公民館学級、ひかり学級に次ぐ第三の学級として土曜学級がスタートしました。

土曜学級開級当初は30名という規模の集団でしたが、30名で1つの集団として活動するには、自治活動の視点から見て規模が大き過ぎ、活動が行いにくいという点から3グループに分かれることにしました。

その3グループの形成方法についても、第三の新しい学級ということで、公民館学級やひかり学級のコース制ではなく、土曜学級では、各回の活動の中で出される青年の様々な要求を取り上げ、様々な素材に取り組む班活動の形態を取り入れてスタートしました。

公民館学級やひかり学級では、活動の素材を大よそ設定し、それをコースとして集団を形成していますが、そのコース制の良いところは、同じ要求を持った青年での集団が作りやすい点だと考えています。

一方、土曜学級では異なる要求を持った青年で集団を形成するので、多様化するニーズへの対応も可能となります。コース活動の良い点、班活動の良い点、それぞれ異なりますが、現在も班活動の形態を維持して活動を続けております。

(1) 体制づくり

毎年2月頃成果発表会を行いその年度の活動を終え、5月頃には前年度の班長や副班長、担当者、生涯学習センター担当職員で集まり、次年度どのような土曜学級としたいか「学級を語る会」を開催してきました。2021年度も依然として新型コロナウイルス感染症の脅威は収まらず、3月から5月頃に行う次年度体制準備も十分な時間が確保できませんでした。

(2) 2021年度体制

2021年度は青年45名で活動を開始、2021年

夏に、土曜学級に参加していた青年お一人が逝去され、現在では44名で活動しています。

班構成は昨年度同様に4班体制です。

- ・夢と音班
(主な素材：音楽、歌、楽器)
- ・虹色のパプリカ班
(主な素材：軽スポーツ)
- ・アマビエ班
(主な素材：生活、経済)
- ・けやき坂班
(主な素材：美術、工芸)

2. 2021年度総括より

総括とは『一年間の活動を振り返り、活動内容、支援の状況、青年の様子、今後の課題と展望』について、毎年2月～3月の数日に亘り担当者間で話し合われる会議です。

(1) 夢と音

他学級の担当者の支援を受け「みんなと友達」という歌を作りましたが、班に作曲できる担当者がいないため、今後も青年の想いを吹き込めた歌を継続的につくり出すことができるかが課題だと捉えています。

夢と音班は、土曜学級の中では一番多くの青年が参加する班でした。その一方で、担当者の支援体制は他の班同様に十分とは言えない状況でした。

このような状況では、青年一人ひとりの活動する様子や状況を各担当者が把握できないこともあったようです。

経験の短い担当者は、青年の名前を覚えることや青年の個性、あるいは必要な支援を把握することに苦労したようです。

担当者不足の中では、担当者のノウハウを改めて体系化して伝えることは困難です。

先輩担当者が当たり前のようにしていることは、経験の浅い担当者にとっては当たり前でないことが多いので、都度先輩担当者から新任担当者へ「青年と接する際の視点」を積極的に示すことの重要性も、今年度の総括でも確認いたしました。

(2) 虹色のパプリカ

小田原外出の際、小田原城址公園で臀部を露出した青年がいました。この状況で担当者は、どのように振る舞うべきだったのか、後日の担当者会で議論いたしました。

その場に居合わせた担当者は、臀部露出直後「それはダメ。やめましょう！」と口頭で注意して終わらせたそうです。

担当者会で確認されたことは、彼ら青年が社会生活上の観点で相応しくない行動をしたときは、その現場で間髪いれずに正せるとよいのではないか、時間が経過するほど、彼らはなぜ注意されているのか、意味を理解することが難しくなるであろうということでした。

時に、彼らに遠慮あるいは知的障がいを持っているのだから仕方ない、ダメなことだがダメと言わないと考える担当者の気持ちも議論されました。

社会生活上、相応しい/相応しくないという学習も青年学級の活動では必要であるということが確認されました。

(3) アマビエ

数年振りに生活について考える活動を目指した班です。

活動のねらい

- ・自身や仲間の生活について考える。
- ・それぞれが認識している問題や課題を共有する。そして共有した問題や課題について、自身の経験や意見を他者と共有する。
- ・他者の経験や意見を自身が吸収することで、未知の問題や課題への対応力を身につける。

複数の青年から「担当者Mと同じ班は疲れる、話が難しい」と発言がありました。

この青年からの意見について、担当者会でも支援の在り方について話し合われました。

青年が“難しい”と感じるということは、当人が持てる力以上のことに挑戦している証ではないか。多少の無理をすることで、より成長することが出来ると考えられるので、大きく間違えた支援ではないことが確認されました。

(4) けやき坂

活動のねらい

- ・ものづくりの活動を通して、お互いに認め合い、落ち着ける集団づくりを目指す。
- ・ひとつのものを完成させる取り組みを通じて、分担や協同を学ぶ。
- ・話し合ったことを目に見える形にしていける。作ることの喜びを体感する。
- ・作ったものを家庭に持ち帰り、ご家族とも達成感や楽しい思い出を共有する。

けやき坂班の総括（抜粋）

最近の活動を振り返ると、私たち土曜学級において担当者が添乗員の如く振る舞う場面が増えたように思います。

(5) 担当者の役割

担当者から青年に向けた支援について

マラカス作りの活動を例に総括をしました。

その活動は、マラカスを装飾するパーツを担当者が程度事前に作り、それを青年に渡していました。青年は受け取ったパーツをペットボトルに貼る作業をしていたのですが、どんな飾りにするか、色は、形は、青年が表現する機会を担当者が減らしていたことが指摘されたのです。

青年主体の活動を支援する中で、担当者が完成の時限や期限を意識し過ぎると過剰な支援となりえます。

“ここまでは失敗しても大丈夫、安全”というガードレールを担当は意識し、安全な範囲で、当人がやりたいと思うことを支援する。たとえ、その結果が失敗でも、当人が決めた行動を実行する権利を大切にしなければならないことを確認しました。

一方で担当者の支援が時代とともに変わってきていることも話されました。

数年前は電車に乗ってどこかへ行こうとするとき、券売機の前で路線図を見ながら、自分の居場所と目的地を見つけ、必要な料金を確認し券売機で適切なボタンを押下し切符を買う一連の経験も大切にしてきました。

しかし、ICカードが一般化した現在、かつての切符の買い方を体験する意義や重要性は著

しく減っています。

(6) 班長会

今年度の班長会開催は、コロナ感染防止のため、2回の開催に留まりました。

コロナ禍以前の班長会では、学級行事など話し合いも多く、話し合い時間の不足が指摘されていましたが、学級休止にともない学級行事も減ったため、班長会で取り上げる議題の減少から時間不足ということは感じませんでした。

その一方で、班長会の運営が断片的となったため、班長との次回以降の班長会見通しや議題整理もできず、班長会の運営や司会進行を担当者で対応せざるを得ませんでした。

(7) 担当者会

学級参加間もない担当者から投げかけられた質問がありました。「担当者会以外の時間（プライベートな時間）でも班の話し合いをするべきか、それは担当者の責任となるのか？」

これに対しては「特に決まりはないが従来は担当者会の中で班活動に関する担当者間の話し合い済むことが多かったのですが、こんにちでは、担当者が集まれる機会が少なくなってきたので、各班が臨機応変に対応した結果である」と解説をしました。

今年度の総括を通じて、学級開催当日のみ参加する担当者にも様々な考え方があったことがわかりました。①当日しか参加できないので、能動的に関わろうという方。②当日しか参加しないので、受動的に関わる方。

しかし、安全に活動をするためには、考え方が異なっても情報共有と支援に対する理解は必須です。

担当者は、(担当者会・家庭との連絡・活動計画と準備・当日担当者のフォロー・ニュース作成・総括執筆・実践報告集執筆対応など)負担の増える傾向にあります。担当者と当日担当者の双方向コミュニケーションの必要性を改めて確認いたしました。

3. 半世紀の節目に向けて

学級開設から半世紀の節目が近づいていま

す。コロナ禍における活動休止、そして活動休止による担当者会での議論の幅が広がりました。

土曜学級では、この状況を次の半世紀を展望する好機と捉えています。

半世紀前の社会環境を背景に、知的障がい者が学校卒業後の居場所として、青年学級が開設されました。

半世紀前の青年たちを取り巻く社会的環境と、今日の青年たちを取り巻く社会的環境は異なります。

ですから、今後の半世紀を見据えた新たな青年学級の取り組みを考える好機だと考えています。

そのひとつに新人学級生を受け入れられない、あるいは少数しか受け入れられない状態は、関係者全員が問題点として捉え、長きに亘り議論されてきました。

青年学級と同じように生涯学習センターの事業には、市民大学やことぶき大学もあります。これらには参加可能な期限がありますが、青年学級には参加可能な期限がありません。

青年学級も、市民大学やことぶき大学同様に学習機会を提供する場所ですが、今の青年学級事業は、市民に対して公平に提供されているのだろうか疑問が残りました。

“卒業”や“とびたつ”は、今から次の段階へ進むというイメージです。

今日の青年たちを取り巻く社会的環境を踏まえれば、青年たちの居場所は半世紀前に比べ明らかに増えています。

例えば、青年学級からの卒業を目指さない。その代わりに、定期的に参加者を入れ替える。その方法は、年度末に解散、次年度参加者募集、公正な抽選。

その結果として前年度と同じ青年が参加しているかもしれませんが、学習機会を提供する方法としては公平だと思います。

このような大きな問題を土曜学級だけで、議論することは出来ないもので、繰り返しとなりますが、今こそ、青年学級全体で次の半世紀を展望する好機だと捉えています。